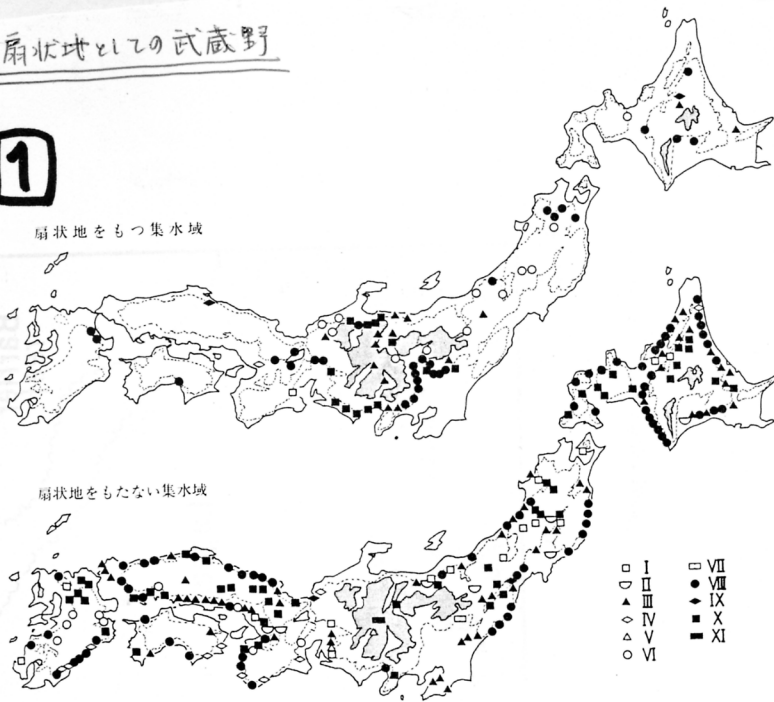


扇状地としての武蔵野

1

扇状地をもつ集水域



扇状地をもたない集水域

□ I  
○ II  
△ III  
▲ IV  
○ V  
○ VI  
● VII  
● VIII  
× IX  
■ X  
■ XI

図VI-12 扇状地の存否を決定する因子の分布  
ローマ数字は表VI-2と共通

扇状地の存在を決定する第1位の因子は、流域によってさまざまである。中部山岳地帯の盆地域では起伏比の大きいこと(▲印)であり、臨海部では降起量の大きいこと(■印)である。関東平野の多くの流域では、扇状地形成域が平野域にあること(●印)が、扇状地を存在させる第1位の因子となっている。青藤(1988) p.147

2

日本の巨大扇状地 青藤(1988) p.147

モロニ作成

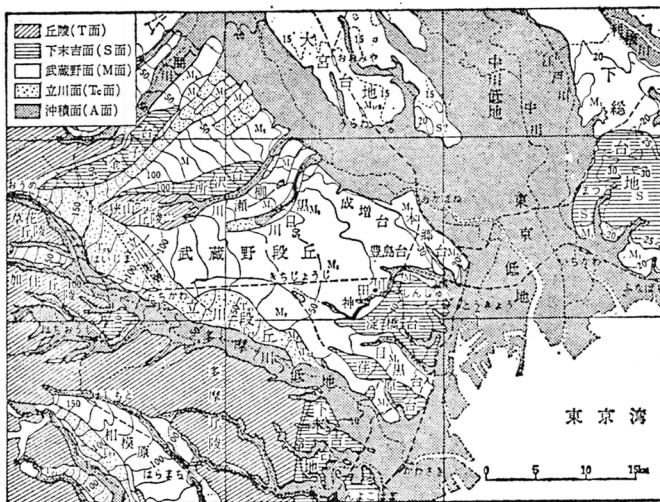
扇面積 100km<sup>2</sup>以上

音更川 1	201.6 km <sup>2</sup>
十勝川 3	110.8
札内川 1	191.4
那珂川 1(那須野)	133.4
鬼怒川 1(宇都宮)	281.7
鬼怒川 4	103.3
多摩川 1	146.4
多摩川 2	160.3
多摩川 3	219.4
相模川 2	103.8
庄川	131.3
手取川	117.2

礫層体積 1.00km<sup>3</sup>以上

音更川 1	1.56km <sup>3</sup>
音更川 2	1.76
札内川 1	2.01
那珂川 1(那須野)	1.16
鬼怒川 1(宇都宮)	2.50
渡良瀬川 1(大間々)	1.29
多摩川 1	1.07
多摩川 2	1.12
多摩川 3	1.93
相模川 2	1.63
御勅使川	1.19
天竜川 1	1.05
木曾川 1	1.21
黒部川 1	1.24
庄川	2.54
手取川	2.37
明石川	1.23

3

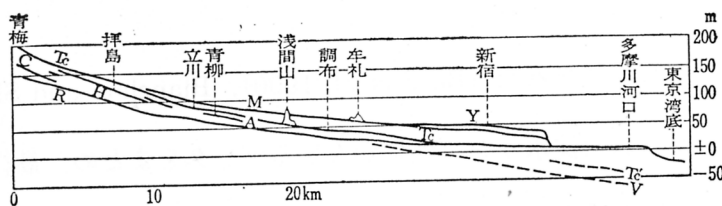


3図 東京付近の地形区分(原図)

太い実線は地形区分界, 細い実線は等高線(間隔10m), 虚線は5万分の1地形図の境を示す。 貝塚(1978) p.30

段丘地帯

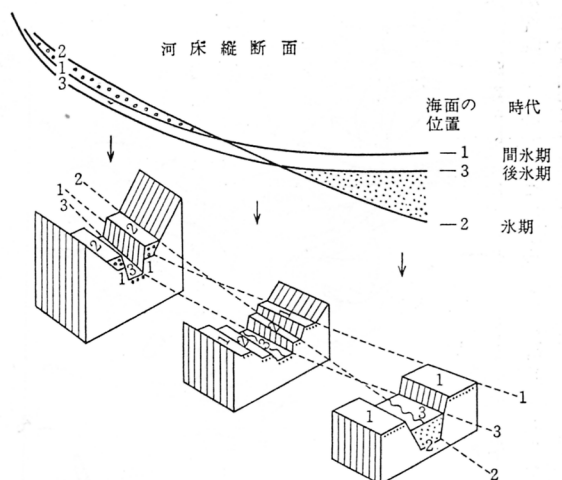
4



4図 武蔵野台地南部ならびに多摩川の縦断面図

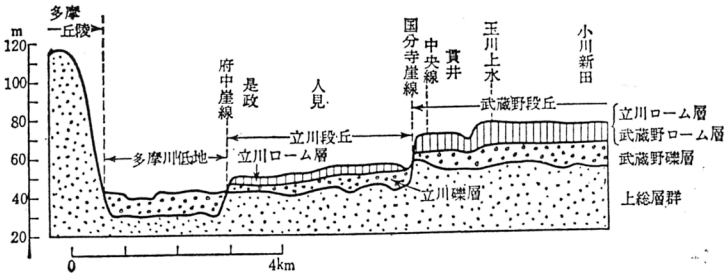
Y: 淀橋台(S面) M: 武蔵野段丘(M面) Tc: 立川段丘(Tc面)  
Tc': 埋没立川段丘(Tc面) V: 沖積層に埋れた谷底 A: 青柳段丘 H: 押島段丘 C: 千ヶ瀬段丘 R: 現多摩川河床 この順は時代の古いものから新しいものへの順。 貝塚(1978) p.31

5



図VI-6 間氷期・氷期・後氷期における河川の堆積・侵食による河岸段丘形成のモデル 貝塚(1977) p.166

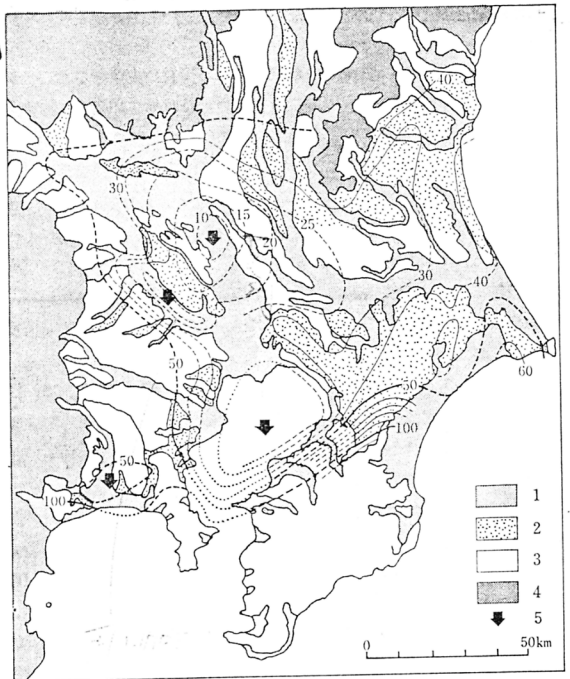
6



貝塚(1978) p.38

15図 小金井をとる武蔵野の南北断面(東京都建設局の資料により作成)

7

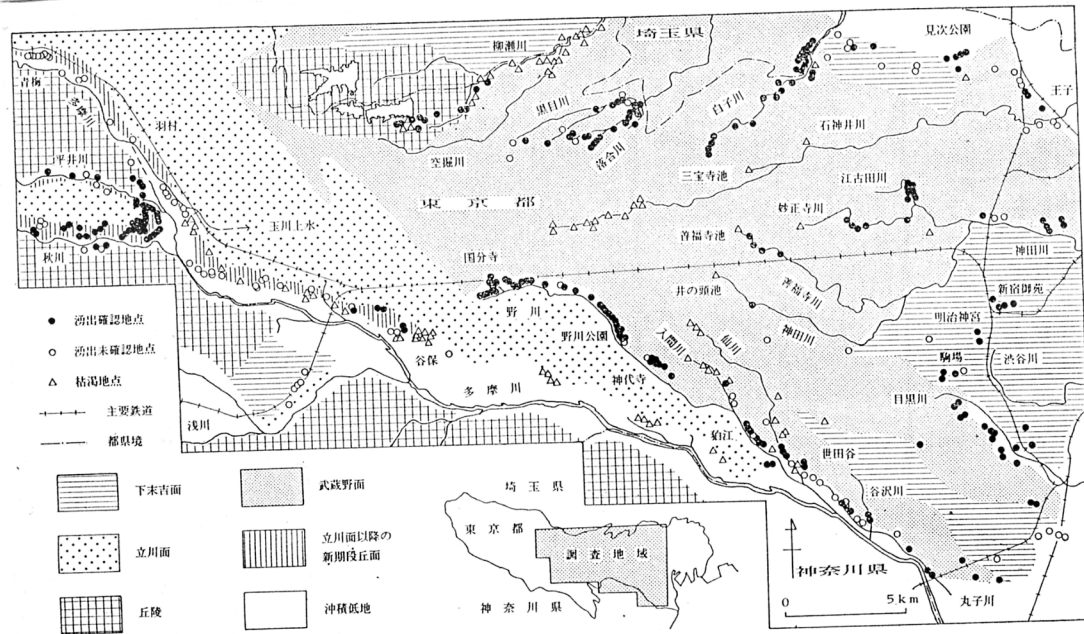


66図 下末吉面の高度分布(貝塚, 1974)  
1 沖積面(A面) 2 下末吉面(S面, 等高線は10m間隔)  
3 段丘(Tc面・M面)と丘陵(T面) 4 山地  
5 相対的な比降地域

貝塚(1978) p.203

武蔵野の湧水

8



第1図 東京の湧水分布(1985~1986年)

Fig.1 Distribution of springs in Tokyo(1985~1986)

新井(1987)

9

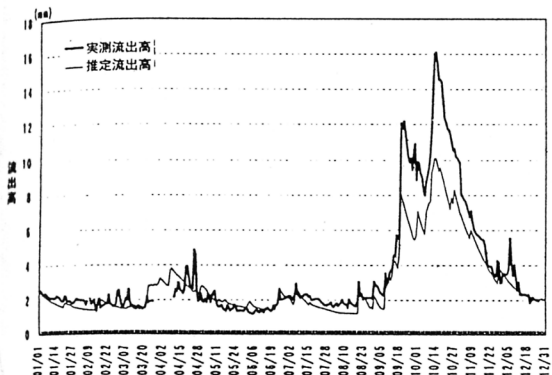


図1 林野庁官舎湧水における推定流出状況(1991年)

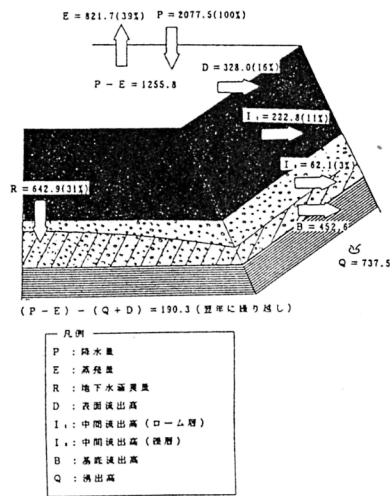
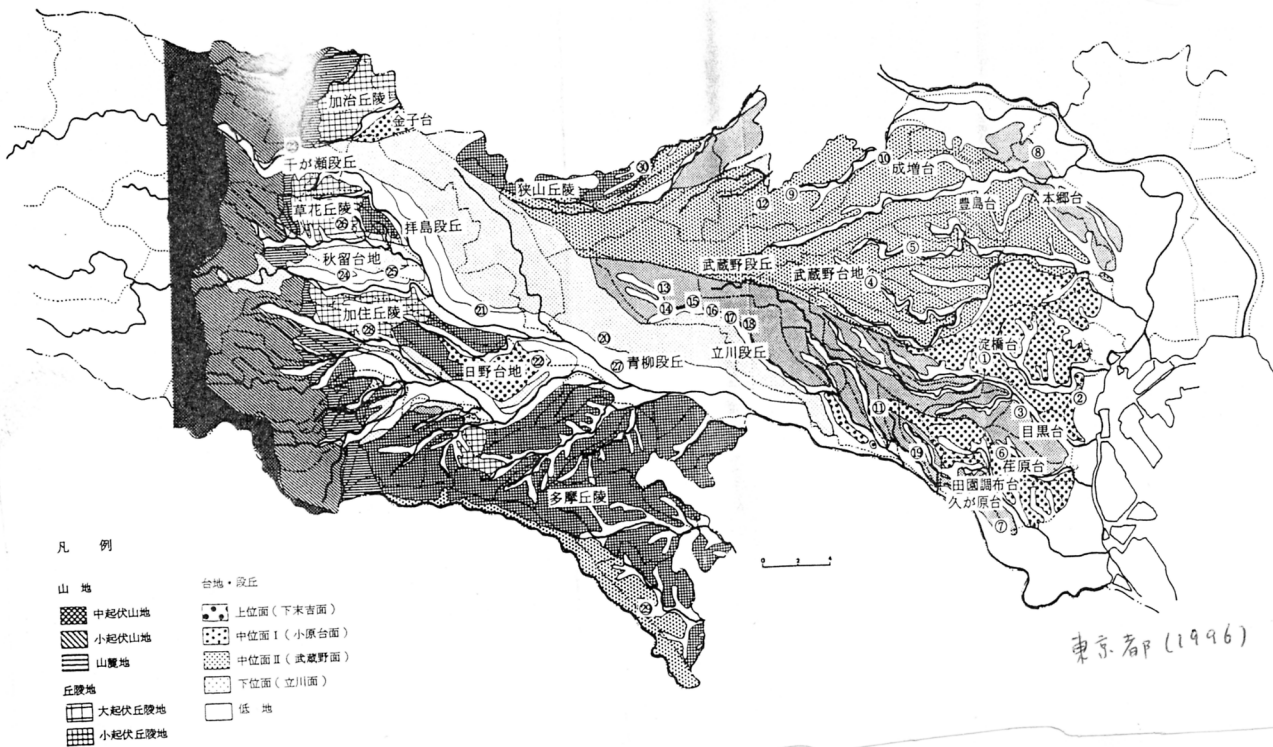
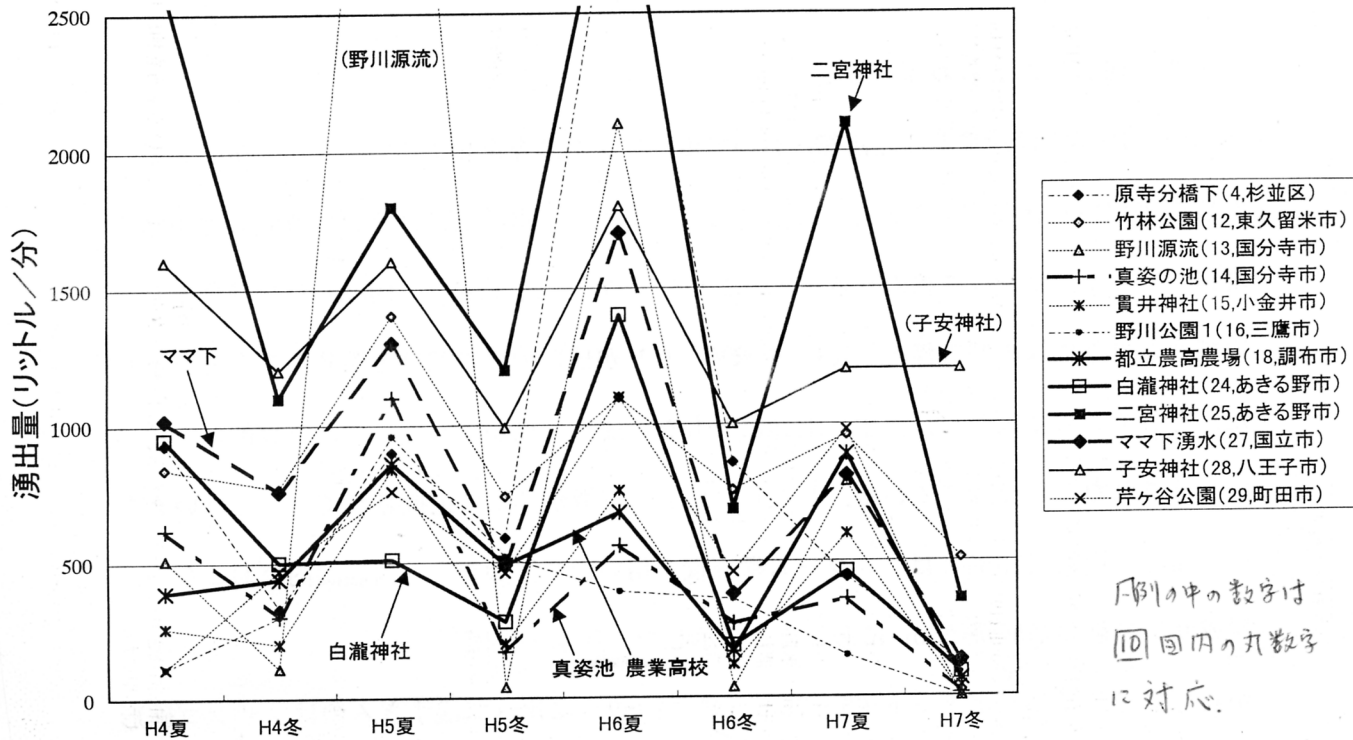


図3 推定水収支状況(林野庁官舎表, 1991年1月~11月)

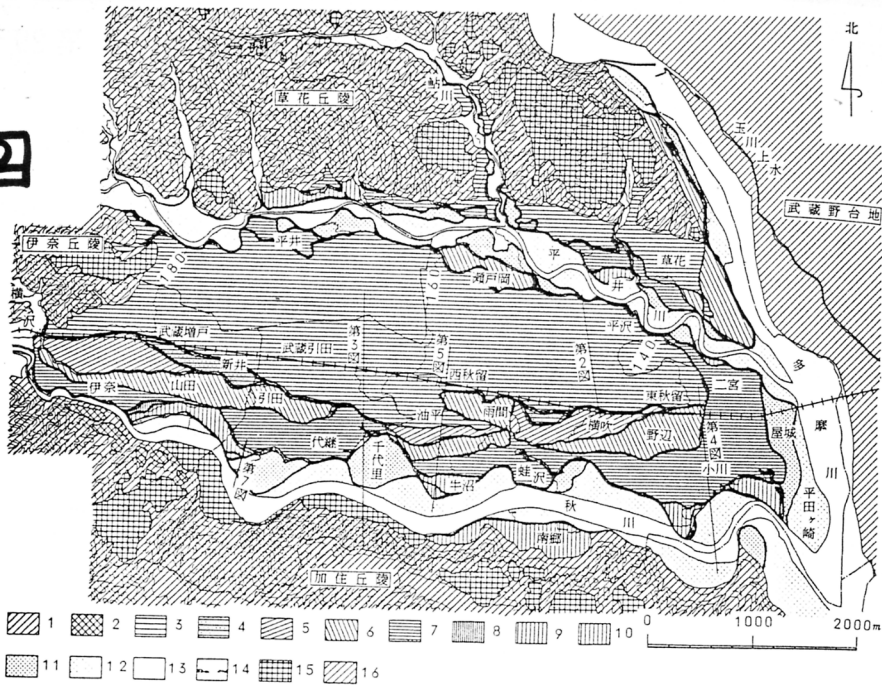
高村・小玉(1996)



東京の主な湧水における湧出量の変動(東京都, 1996により作成)



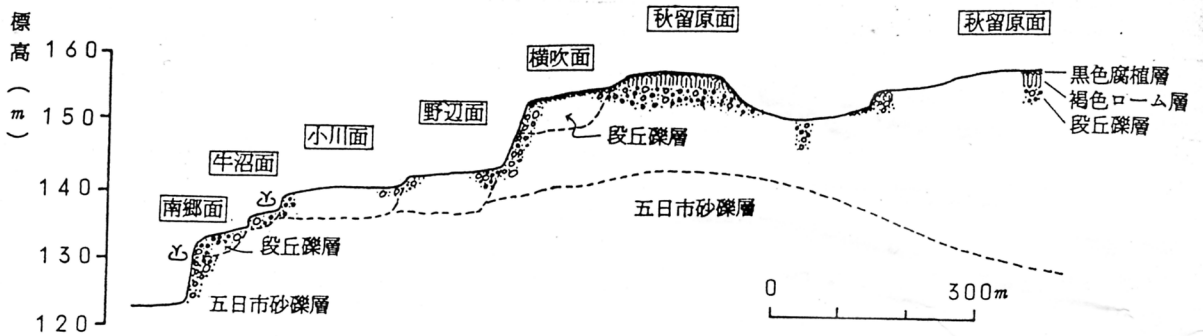
12



第1図 秋留台地および周辺地域の地形分類図  
 1. 山地および丘陵地 2. 秋川南岸の河岸段丘 3. 秋留原面 4. 新井面 5. 横吹面 6. 野辺面 7. 小川面 8. 寺坂面 9. 牛沼面 10. 南郷面 11. 屋城面 12. 氾濫面 13. 現河床および河川敷 14. 段丘崖 15. 人工改変地(埋立地・盛土地) 16. 多摩川東岸(左岸)の河岸段丘  
 (図内の細い実線は等高線で20m間隔、数字は等高線の標高を示す)

角田(1986)

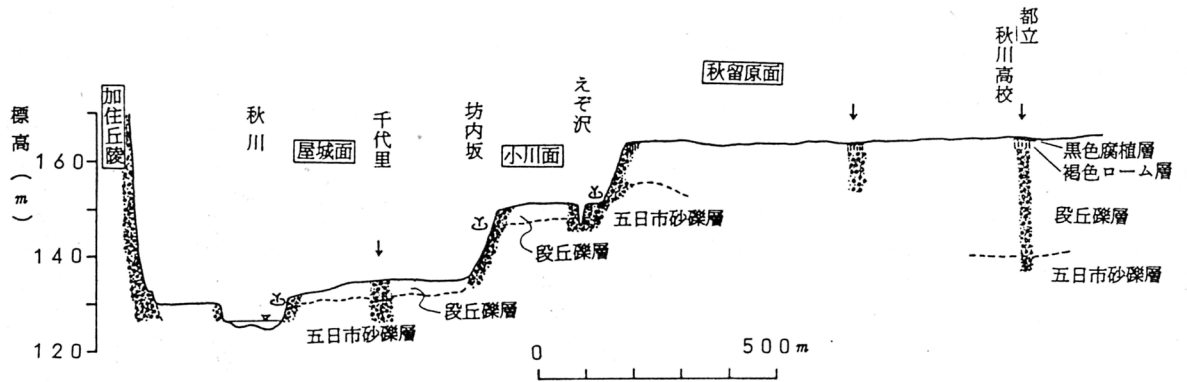
13



第5図 西秋留駅から秋川にかけての地形・地質断面図  
 ㊦は湧泉, 断面の位置は第1図を参照。

角田(1986)

14

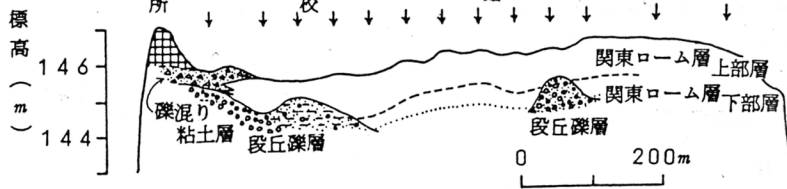


第3図 都立秋川高校から加住丘陵にかけての地形・地質断面図  
 矢印はボーリングの地点, ㊦は湧泉, 断面の位置は第1図を参照。

角田(1986)

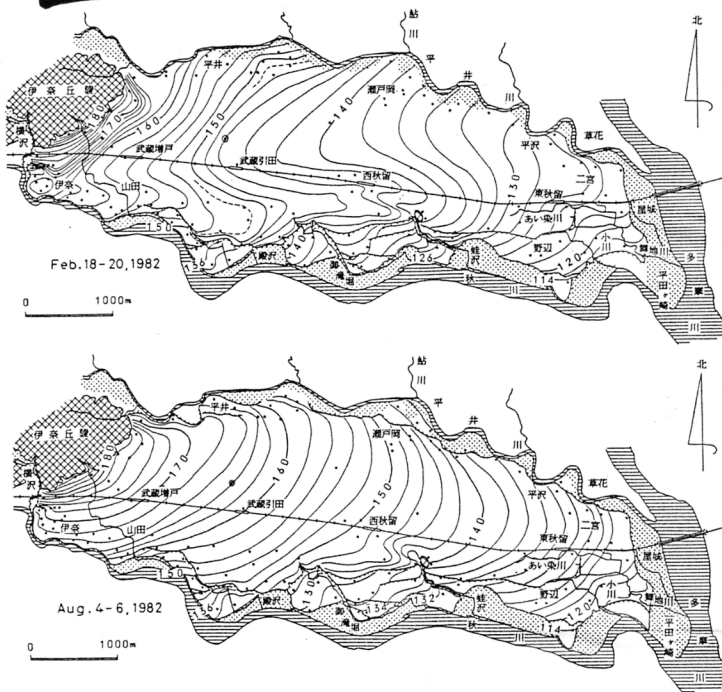


15



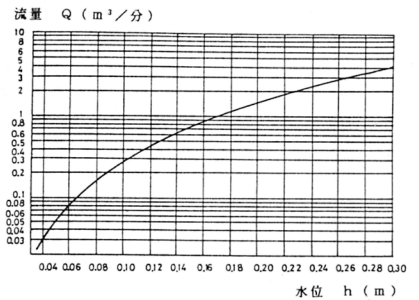
第2図 秋留台地の東部における秋留原面の地形断面と表層地質  
 矢印はボーリングの地点。点線はボーリングの基底の位置。断面の位置は第1図を参照。  
 角田 (1986)

16



第9図 秋留台地の不圧地下水等高線図  
 上図は低水時、下図は豊水時の等高線図、図内の数字は不圧地下水等高線の標高(単位はm)で、等高線の主曲線は2m間隔。鎖線は地下水湧布線、アミ模様は氾濫低地、黒点は測水井の位置で、◎印は簡易自記水位計の設置場所。  
 角田 (1986)

直角三角堰の水位と流量



四角堰の水位と流量

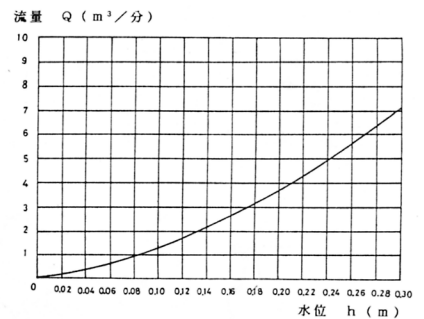


図6-10 堰の水位と流量 (JISによる)

新井 (1994)  
 p.62

精密流量観測

(c) 直角三角せき (図 1.3 参照)

沼知・黒川・淵沢の式

$$Q = Ch^{5/2} \dots \dots \dots (1.3)$$

$$C = 1.354 + \frac{0.004}{h} + \left(0.14 + \frac{0.2}{\sqrt{W}}\right) \left(\frac{h}{B} - 0.09\right)^2 \dots \dots \dots (1.3 \cdot a)$$

ここに、 $Q$ : 越流量 ( $m^3/s$ ),  $h$ : 越流水深 ( $m$ ),  $C$ : 流量係数 ( $m^{1/2}/s$ ),  $W$ : 水路底面から切欠き下縁までの高さ ( $m$ ),  $B$ : 水路の幅 ( $m$ ).

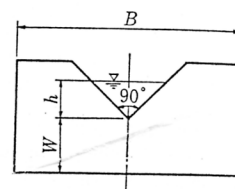


図 1.3 直角三角せき

工本学会編 (1985) p.284

17

